

平成17年度（第20回）
学術及び総合情報処理センター長会議議事要旨

開催日時：平成17年10月7日（金） 14時00分～17時10分

開催場所：アクトシティ浜松 コングレスセンター41会議室

出席者：文部科学省研究振興局情報課学術基盤整備室長 柴崎 孝

文部科学省研究振興局情報課学術基盤整備室学術情報第二係 高橋 耕輔

財団法人日本情報処理開発協会情報セキュリティ部 ISMS 制度推進室長 高取 敏夫

弘前、岩手、秋田、山形、福島、茨城、筑波、宇都宮、群馬、埼玉、千葉、東京農工、東京工業、お茶の水女子、電気通信、一橋、横浜国立、新潟、長岡技術科学、上越教育、富山、金沢、福井、山梨、信州、岐阜、豊橋技術科学、三重、大阪外国語、神戸、奈良女子、和歌山、鳥取、島根、岡山、広島、山口、徳島、香川、愛媛、高知、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、琉球、北陸先端科学技術大学院、静岡の各大学のセンター長及び部門長（代理者を含む。）

配付資料：

1. 平成17年度（第20回）学術及び総合情報処理センター長会議資料（冊子）
2. 文部科学省研究振興局情報課学術基盤整備室長説明資料一式
3. 基調講演資料一式
4. 議事資料

「第17回情報処理センター等担当者技術研究会」

「第17回学術及び総合情報処理センター研究交流・連絡会議報告」

「第20回学術及び総合情報処理センター長会議への要望」

「第18回学術及び総合情報処理センター研究交流・連絡会議及び第10回学術情報処理研究集会にかかる委員（案）」

「情報基盤システムの点検・評価指針の策定について（資料）」

「情報基盤システムの点検・評価指針 — 計算サーバ系 — 」

「計算サーバシステムの評価項目」

5. 静岡大学概要

会議内容：

当番機関である静岡大学総合情報処理センター八巻センター長及び望月副センター長の司会により、静岡大学長及び静岡大学総合情報処理センター長挨拶の後、下記のとおり会議を開催した。

1. 文部科学省研究振興局情報課柴崎学術基盤整備室長挨拶

文部科学省研究振興局情報課柴崎学術基盤整備室長より、挨拶を兼ねて最近の学術情報基盤の整備等に関する動向について、以下の説明があった。

(1) 平成18年度概算要求の状況について

情報科学技術関連施策として、「最先端・高性能汎用スーパーコンピュータの開発利用」、「産官学連携による先端シミュレーション人材育成拠点形成プログラム」及び「高次対話機能の解明に向けた基盤技術の研究開発」の3件の新規プロジェクトを含め、情報科学技術関係の研究開発を推進していくための概算要求を行っている。

国立大学法人運営費交付金特別教育研究経費に関しては、「学術情報流通基盤の整備」に加え、国立情報学研究所と7大学の全国共同利用情報基盤センターが連携して実施する「大学間連携のための全国共同電子認証基盤構築」を要求している。また、科学技術・学術審議会の学術情報基盤作業部会の中間報告を受けて、いくつかの大学の学内LANの整備等に関する要求を行っている。

(2) 科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会について

6月末に「学術情報基盤としてのコンピュータ及びネットワークの今後の整備の在り方について(中間報告)」、「学術情報基盤としての大学図書館等の今後の整備の在り方について(中間報告)」及び「我が国の学術情報発信に関するこれまでの審議状況まとめ」が取りまとめられ、7月21日付けで国公立大学の学長及び各大学共同利用機関法人の機構長に対し通知が行われた。今後、中間報告を受けて更なる審議を行い、平成17年度中に最終的な報告をまとめる予定である。

(3) 科学技術・学術審議会研究計画・評価分科会情報科学技術委員会計算科学技術推進ワーキンググループについて

平成22年度におけるペタフロップス超級スーパーコンピューティングの実現を想定して、今後の計算科学技術の推進に係る諸問題について検討を行い、第二次中間報告をまとめたところである。

(4) 情報処理センター等の今後の展開について

情報処理センター等には学術情報基盤としてより積極的にその役割を果たし、重要性を学内外に主張していくことが求められている。

このことから、現状をよく分析して、学内のニーズを絶えず把握し、必要なシステムの導入、運営の変更、種々のサポート等を機動的に実施するとともに、図書館等関連組織などとも密接に連携、協力を行い、学術情報、研究成果の発信機能の強化に努めるなど、大学の情報化を先導する意欲的な取り組みの実施をお願いしたい。また、コンピュータ及びネットワークの持続可能な整備運用計画を策定し、それに基づいた学術情報基盤の整備を

期待したい。

2. 基調講演

(1) 「情報セキュリティマネジメントの重要性」

財団法人日本情報処理開発協会情報セキュリティ部 ISMS 制度推進室 高取 敏夫室長から、情報セキュリティマネジメントの重要性について、以下の内容で説明があった。

配付資料を参考にして自分の組織、自分の構築したネットワークやシステム、保持している情報資産に応じて ISMS の仕組みにぜひトライ願いたい。

昨今の個人情報漏洩事件を考えると 100%安全というセキュリティは存在しないので、社内体制、組織をどう強化していくかが重要である。また、情報を扱うのは人間であるからモラルの問題もあるため、個人情報が漏洩するケースにおいて何が原因かをしっかりと見分ける必要がある。

情報セキュリティの考え方は、インターネット上で脆弱部分を突いた不正アクセスによる情報抜き取りやファイル誤送信、データの盗難や紛失等といった部分をどのように解決するか、また、機密性、完全性、可用性のバランスを保ち維持することが基本である。

マネジメントシステムとは、ISMS プロセスに適応した Plan、Do、Check、Act のサイクルを継続的に回しながら改善につなげていくことであり、セキュリティマネジメントは、リスクをどうコントロールするかである。

ISMS の必要性としては、単に技術的管理策の実装だけではなく、実装した管理策が常に情報資産の現状に適し、その効力を形骸化させないことである。

また、リスクマネジメントを基本とするため、業務フローや取り扱う情報資産の特性等に合わせ情報セキュリティが改善される。それは、単に「攻撃を防ぐ」といった守りの技術対策ではないので、真の利害関係者の期待に応えることが出来る。

ISMS のメリットとして、組織としてセキュリティに対するスキルの向上、責任の明確化、緊急事態の対処能力向上など総合的マネジメントの視点から効率的なセキュリティ対策ができ、認証取得すれば対外的にも信用性が高くなることがあげられる。

最初から認証取得を目指さなくても、自らがマネジメントシステムを構築し運用するといったことが非常に重要で、かつ、効果があると強調し、ISMS 適合評価制度についても説明があった。

(2) 「静岡大学における情報セキュリティマネジメントへの取り組み」

静岡大学総合情報処理センター 大島 純助教授から、ISMS 認証取得前の静岡大学のネットワークに対する情報セキュリティの状況、ISMS 認証取得に至った経緯、サーバランスを受けた時の状況とその後の対応策等について説明があり、ISMS 認証取得は大変な作業であるが、多くのメリットがあり、また、ISMS の基準に沿って職員が共通認識を持って作業できたこと

が大きかったことなどが述べられた。

基調講演に対する質問等については、会議時間の関係上、後日、回答を文書化し、配布することとした。

3. 議 事

(1) 報告事項

① 第17回情報処理センター等担当者技術研究会について（琉球大学）

琉球大学高良総合情報処理センター長から、平成17年9月8日～9日に、53名が参加し、実施されたこと並びにこの研究会は、情報処理センターの技術職員が一堂に会して、最新技術やシステムの管理、研究発表、意見交換を主旨として実施している旨の報告があった。

② 第17回学術及び総合情報処理センター研究交流・連絡会議について（佐賀大学）

佐賀大学渡邊学術情報処理センター長から、研究交流・連絡会議の開催については、法人化に伴い省令施設という概念がなくなったが、現在のところ総合情報処理センタークラスのセンターに声をかけお集まりいただいております。今年度は、平成17年9月15日及び16日の両日に実施し、1日目は45大学73名の参加があり、また、2日目は学術情報処理研究集会として79名の参加を得て、17件の研究発表がなされた旨の報告があった。

(2) 議 題

① 第17回学術及び総合情報処理センター研究交流・連絡会議における要望について（佐賀大学）

佐賀大学渡邊学術情報処理センター長から、要望事項として、学術及び総合情報処理センター研究交流・連絡会議の再定義について、以下のとおり説明があった。

法人化に伴い総合情報処理センターの定義があいまいになったので、この会議の名称及び参加範囲を再定義する必要があると思う。これは、何年かに亘って出ている議論であるため、以下の改組案についてご検討をお願いしたい。

- ・ 参加範囲を「国立大学法人情報系センター協議会」と一致させ、名称を「国立大学法人情報系センター研究交流・連絡会議」とする。協議会が文部科学省を含めた連絡調整・運営協議を基本とするのに対し、研究交流・連絡会議は技術的相互交流・情報共有を基本とする。
- ・ 来年度の開催は、別資料の申し合わせ「第18回学術及び総合情報処理センター研究交流・連絡会議」及び「第10回学術情報処理研究集会」にかかる委員（案）に準拠して取り扱う。
- ・ 今後の開催が徐々に規模の小さい大学の順番になるが、開催が困難であれば断れることを確認する。参加も各センターの自由とする。

- ・ 「学術情報処理研究集会」は継続とする。この件に関しては、担当者技術研究会と内容が重複する部分があるので、一緒にしてはどうかという意見があった。しかし、担当者技術研究会は技術職員の方の研究集会で、議論の場を奪うことになりかねない。ただし、一本化もありうる。
- ・ 「学術及び総合情報処理センター長会議」の再定義については、センター長会議自身の判断とする。

審議の結果、名称を変更し、会議の内容については原則存続するという事で、承認された。

② センター長会議の再定義について（静岡大学）

- ・ 担当者技術研究集会、研究交流・連絡会議、センター協議会及びセンター長会議は参加対象者や会議内容が違うので、センター長会議は存続すべきであると考えます。
- ・ 名称も研究交流・連絡会議が国立大学法人情報系センター協議会に準拠させているので、センター長会議も「国立大学法人情報系センター長会議」とし、センターの組織、運営についての情報交換の場とする従前の基本的なやり方を踏襲する。

ただし、参加招請する大学については、予算規模等の関係で従前は限定していたが、それを取り払うことも可能と考える。

- ・ 当番機関については、小規模大学での開催が困難な場合には、相談に応ずることとする。審議の結果、特に異議がなかったためセンター長会議の再定義について、承認した。

③ 情報基盤システムの点検・評価指針の策定について（千葉大学）

千葉大学から、以下のとおり説明と提案があった。

これまでの経緯として、評価項目の内容と評価の集約に対する合意が、前回の第19回センター長会議で明確にされず最終結果をまとめることができなかった。

計算サーバー、教育用サーバー、ネットワークシステム、情報サービスの4つのワーキンググループを設置した件に関しては、各大学情報系センターの多様性を吸収するために特色を出せるよう考えたワークグループである。また、当初からの合意事項の確認として、

- ・ 数量的なことだけで行くと、数字が一人歩きする危険性があるが、部分的にでも外部評価に耐えられるような数量的な基準、評価が必要であること。
- ・ 特色を生かした独自性のある評価シートを定める件については、協議会においても承認済であること。
- ・ 表形式の評価シート及びその項目の説明文書を早急にまとめ、それを協議会のメンバーである各情報系センターに送付すること。
- ・ 各センターで評価シートをどのように取り扱い利用するかは、各センターが独自に定める。

その上で、計算サーバーについて何らかの形で統計的に処理した結果程度のものは作成したいが、大学名が特定できるような回答が紐付けされた状態では、抵抗が生じる懸念があるので、まとめた結果の取り扱い方法について合意を取りたい。また、本会議において評価項目、評価の取りまとめの方法について審議願いたい。その条件として、

- ・ 各センター毎に温度差があるため、共通した統一的な評価項目を定めるのは困難であるので、評価項目の中に、各センターの特色、独自性を出せるようこの評価項目を元にして任意の評価項目等を加除修正し作成する。
- ・ 統計的に処理した結果は数値として出されるが、各センターの相対評価、序列化につながる方法で処理する。
- ・ 評価項目ができ上がり、各センターがそれぞれで利活用いただければよいので、取りまとめに反対のセンターは提出せずに自己利用等し、賛成される場所は提出いただくこととする。

以上の内容で進めたい旨の提案があった。

上記の説明を踏まえて、以下の意見が出された。

- ・ 話が出た端緒は、会計検査院の指摘からであるが、目的は基本的にはシステムが有効利用されているかということではないか。
センターの評価でなく、運用しているシステムの評価で、有効利用するシステムを作っているかどうかの評価の指針だと考える。
各システムについて、目標、目的、運用状況、活用状況があり、運用方針、目標、有効活用がわかるドキュメント及び数量的指標を作るべきであるというのが基本ではないか。項目については、これを基準として取捨選択、追加、削除して、その項目について評価し、自分のところのシステムが有用で、かつ、有効活用されているということが外部に対し説明できる形の報告書として出すべきものだと思うので、それを統計的に処理して、結果をどう取り扱うかという議論は理解できない。
- ・ 評価項目については、このバージョンで進め今後変えていけばいいと思う。評価項目を決めるというのが、当初の出発点であった。セットとして包括でやる必要はないのではないか。いろいろな情報資産のアセスメントが必要になってくるため、この指標というのは非常に有用と考えられる。表やグラフを作らなければならないことはなく、評価項目については、多少の異論あろうかと思われるが、提案では全部網羅しているので、これでよいのではないか。また、必要な項目があれば追加していくという扱いなので、今後は、改定なりマイナーチェンジを行い進めていけばよいのではないか。
- ・ 点検、評価として、何を何の目的で行おうとするのかそれを明確にし、ここで合意を得て、その上で評価項目を決めていくべきである。その合意がなされないまま来たので各論に入り混乱が生じているのではないか。

- ・ これまでの経緯として、評価項目を作るのが重要であって、各評価項目についての善し悪しといったカスタマイズの議論ではない。
- ・ 自由参加であれば4点セットあるが、部分的にも参加できるのでデータとしては有効なデータになるのではないか。
- ・ 何のための指針であるかというところを明確にしていきたい。そうでないと結果的にセンターの相対評価、序列化となってしまう事が懸念される。そうならないよう基盤システムの点検評価指針であるということを前提に確定していきたい。

今回の議論を踏まえて、点検・評価の指針を發布し、その内容については、次回の国立大学法人情報系センター協議会において、承認を得ることとした。

なお、点検・評価への参加や利用方法は、各センターの判断に任せ、評価項目についてはとりあえず評価を実施したうえで、改善等を行う。統計を取ることの是非等については、今後も審議を継続していくこととした。

また、評価項目については再度千葉大学で整理し、作業終了後に各センターの担当者に作業用として提供することとした。

④ 次期開催校等について

平成18年度第18回学術及び総合情報処理センター研究交流・連絡会議については、岩手大学に、平成18年度第21回学術及び総合情報処理センター長会議については、福井大学においてそれぞれ開催することとした。

⑤ その他

議長から、時間の関係上割愛した提案議題については、次期開催校の福井大学と協議し、議題として取り上げたい旨の提案があった。

静岡大学学術・情報担当理事閉会の挨拶の後、議長により閉会が宣言された。